

ゴミ、捨てんなよ!



The wisdom under the Tree.

関係人口のつくり方



自己紹介









僕たちは
島で、
未来を
見ることに
した

株式会社巡の環 著
阿部裕志（代表取締役）
信岡良亮（取締役）



この本に書ききれなかった
たくさんのおいへんなことを思うと、胸が熱くなる。
若さと自然と人々の絆、どれが欠けても成功しなかった
ある奇跡の本です。

——よしもとばなな

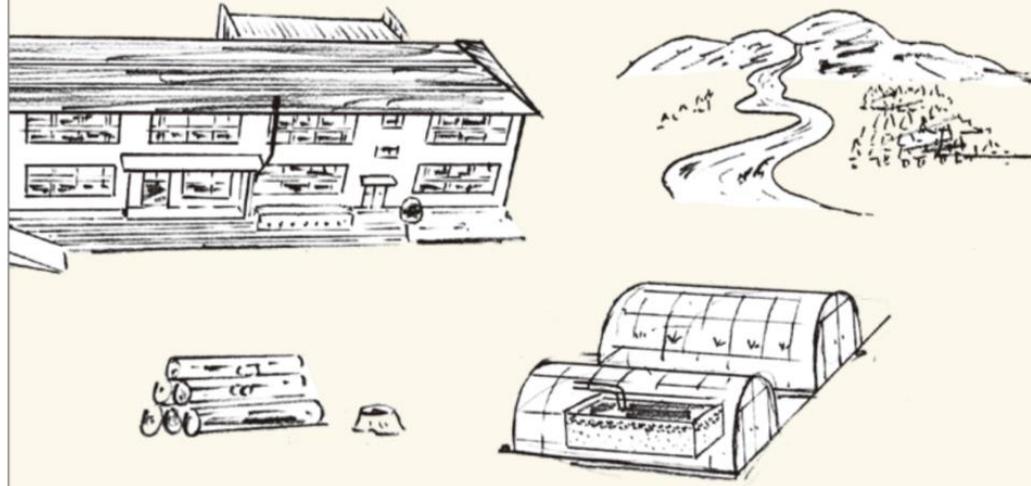
日本は世界の離島だ。
離島から日本を変え、
世界を変える。

——養老孟司

ローカル ベンチャー

牧 大介

地域には
ビジネスの可能性が
あふれている



地域に住む・住みたい、すべての人へ。

地域経済はもっと儲かる！

人口約1400人の小さな村、岡山県・西粟倉村で二社で5億8千万円の売り上げを達成した著者が、2009年からの起業ストーリーと、「地域でのベンチャービジネス」を初めて語った――。

木楽舎
KIRAKUSHA

指出一正
Kazumasa Sashide

ぼくらは地方で 幸せを見つける

ソトコト流ローカル再生論



関係人口をつくる

定住でも交流でもないローカルイノベーション

ローカルジャーナリスト・田中輝美

人口減少地域を救う
新しいキーワードは
「関係人口」だ！

Double
Residency

Local
Volunteering

Regular
Visits

Donating
(Hometown
Tax Option)

Local
Specialty
Shopping

「移住」しなくても、
地域を学びたい！
関わりたい！
過疎先進県・島根の取り組み
「しまコトアカデミー」から、
地域との多様な関わり方を考える。

ソーシャル&エコ・マガジン 観光以上、移住未満の第三の人口! 「関係人口」の大特集!

ソトコト

No.224
February
SOTOKOTO
823YEN

関係人口の
作り方
Q&A

観光以上、移住未満。

関係

人口

入門

Think Local, Think People

ソトコト 関係人口(通巻224号) 2018年2月1日発行(毎月1日発行)

関係人口とは？





しまこトアカデミーとは



講座情報



講師・メンター



受講生の声



ニュース



インターンレポート



“移住”しなくても
地域を学びたい！
かかわりたい！

Type 2

東京で地域を発信する。

「ハツモノ!倶楽部」で、東京にいながら島根に還元!

東京の人に地域に関心を持ってほしいと、以前勤めていた『毎日新聞社』の新規事業で関わった青森県弘前市の初物リングでつくった「シールドを飲む会」を開いた山尾信一さん。その後、中学・高校を過ごした島根に思いが至り、海士町の岩牡蠣「春香」を取り寄せ、都内の出雲料理店で第1回の「ハツモノ!倶楽部」を開催した。

島根に限らず、長崎県のジャガイモや兵庫県黒豆なども紹介している。「東京にいながら地域に還元できるものがあると気づき、東京と地域を結ぶ

「ハツモノ!倶楽部」主宰・山尾信一さんの関係人口チャート



山尾信一さん
大阪府生まれ。41歳。Webメディアディレクター。中学・高校時代を松江市で過ごした。現在は東京でフリーランス。「ハツモノ!倶楽部」は東京と地域を結ぶだけでなく、交流した参加者同士もつないでいる。



クラウドファンディングで、島根の食のイベントを開催!

島根大学を卒業後、東京へ出た杉本頌子さん。「島根との関わり方を模索するなかで、クラウドファンディングに挑戦しました。」そこで、「東京に島根の『おいしい』を届ける」という食のイベントの開催資金を募り、目標金額を達成。島根ゆかりの5つの料理店で特別メニューを依頼し、参加者に振る舞い、津和野町の女性農家を招いた交流会も開いた。イベント後も島根の食材を購入しつづけている料理店もあるそうだ。「ただ、その後はイベントを開けておらず、継続する難しさを感じています」と残念そう

「東京に島根の『おいしい』を届ける」主催・杉本頌子さんの関係人口チャート



が、「今後も東京にいる関係人口の潜在層を発掘したいです」と意気込む。

ラジオ「ふるさとアンテナ」で、島根での上映会の開催を宣言!

東京・北千住に放送局があるインターネットラジオ「ふるさとアンテナ」のMCを担当し、島根や地域を発信している和田更沙さん。番組のなかで、「映画をきっかけにつながる場を島根につくりたい」と宣言し、まずは2月に都内で上映会を開催。鑑賞後は、参加者が故郷を語り、つながる場を設ける。憧れて東京に出たが、帰省の度に街が寂しくなる様子を見聞きし、東京で何かできることはないかと島根と関わるようになった。「数年前は、島根と関わろうなんて自分は想像もできませんでした。私が変

「ふるさとアンテナ」MC・和田更沙さんの関係人口チャート



和田更沙さん
島根県生まれ。34歳。東京外国語大学卒業。明治大学に勤めつつ、3か月に1度、第3土曜21時からのインターネットラジオ「ふるさとアンテナ」のMCを担当。目標は島根県内で上映会やイベントを開くこと。

わったように、上映会の参加者が島根や地域と関わるきっかけになればうれしいです」と話す。



島根編です!

たとえば、こんな関係人口。

Type 1

自分の挑戦したいこと・好きなことを地域に近づける。

興味のある「教育」を、島根での仕事の選択肢に。

3歳の男の子を育てる主婦の曾根由佳莉さん。以前、専門学校の教務スタッフを務めていたこともあり、教育への関心が高い。「島根県・隠岐島を訪れたときに「魅力化コーディネーター」という職種を知り、出身地の浜田市に配置されることになったら、仕事の選択肢として考えたいと思って」と今、島根大学の「ふるさと魅力化フロンティア養成コース」をウェブで受講中だ。「しまこアカデミー」のインターンシップで交流した島根の人を、旦那さんと一緒に再訪問するなど何度も島根に通いつつ、「将来を考え

主婦・曾根由佳莉さんの関係人口チャート



曾根由佳莉さん
島根県生まれ。千葉県在住。34歳。「しまこアカデミー」5期生。島根と関わるきっかけは、軽い気持ちで出かけたしまねUターンフェア。そこで「しまこアカデミー」のメンターに会い、島根に興味が増えました。

ながら、家族がその気になったら移住します」と関係人口の濃度を深めている。



服飾デザイナーから、関心のあった農家へ転身!

東京で17年間、服飾デザイナーとして勤め、多忙な毎日を送ってきた中島梨恵さん。「そろそろ、ほかの仕事や生き方も経験したいな」と思い、退職。食や農、そして島根に関心があったので、島根で農家になることを決意した。移住の準備のため、島根に9回通い、いろいろな地域や人との関係を深め、移住先を自然が豊かな吉賀町に決めた。「現地に行くとき素敵な出会いがたくさんあります。知り合ったおじいさんやおばあさんが気にかけて『元気が?』と東京に電話をくださったり。縁もゆかりもな

新・吉賀町民・中島梨恵さんの関係人口チャート



い地域ですが、通ってつくれた関係があるので不安はありません」と笑顔で話すと、



金魚が大好き! 休耕田で養殖に挑戦。

子どもの頃から生き物が好きで、熱帯魚などの卸会社で7年間ほど勤めていたが、「長男なのでそろそろ」と島根に戻る手段を模索した。その一つが「しまこアカデミー」。メンターから島根での熱帯魚の養殖を薦められ、金魚で実践することに。さらに、出身地である出雲市の地域おこし協力隊の募集を見つけて応募すると採用され、家族と一緒にUターン。

金魚生産農家・山田真嗣さんの関係人口チャート



山田真嗣さん
島根県生まれ。34歳。東京水産大学(現・東京海洋大学)卒業後、熱帯魚などの卸会社へ。2016年Uターン。「自分がしたいことだけでなく、地域住民として必要なことも。結果、事業につながりました。」

今、休耕田を活用した金魚の養殖に地域の人の助けを得ながら挑戦中!



地域だけでなく、自分の可能性も発見！
 いかででしたか？ 関係人口がどういう人たちか、わかってもらえたでしょうか。「僕も関係人口になれそう」とか、「すでに、私は関係人口かもしれない」と思われたい方、たくさんおられる気がします。「島根の産物はときどきしか買わないけど、役に立つの？」。ハイ、立ちます。関係人口に優秀や上下はありません。あるのは濃淡、グラデーションだけ。関係人口の定義である「地域に多様なかたちで関わる」というのは、そういう意味。関わり方は人それぞれ、多様でいいのです。というより、むしろ多様であってほしいと願っています。

「関係人口って？」の答えは、それぞれの関わり方のなかに。
 地域は、さまざまな課題を抱えていると報じられています。人口減少、それに伴う税収減、産業の衰退、農家の高齢化による耕作放棄地の増加、少子化による廃校、インフラ維持の困難さ……。そして何よりも、そんな地域の未来に不安を覚えた住民たちが未来をあらかじめかけていること。それが、最大の課題かもしれません。関わり方が多様だからこそ、多様な課題の一つひとつに解決策を導き出すのではないのでしょうか。



地域の課題は、逆に地域の可能性であり、誤解を恐れずに言うところ、地域のおもしろさでもあります。そのおもしろさ、若い世代は気づきました。まるで、「新大陸」を発見したかのように、その新大陸は、荒蕪と広がる未知なる大陸ではありません。「ないもの」は多いですが、「ないならくろう」と新しくカフェやシェアオフィスをつくる。そうすると地域の人が、いる。そうすると地域の人が、いる。それが、喜ばれる。……そんな心の新大陸です。生きている手応えや、地域だけでなく自分の可能性までも、都会の若者は新大陸に見出しているのです。

都会と地方の「ズレ」や「分断」を埋め合わせ、つなぎ直してくれるのが関係人口です。ヒト(地域への愛着が増す、ファンや訪れる人が増える)、モノ(地域の特産品の認知度が上がる、売れる)、カネ(地域への投資が増える)、そして、アイデア(地域に新しい知恵やアイデアをもたらす)という社会的インパクトが関係人口によってもたらされることが、人口減少時代の地域の力になるのではないかと考えています。

そんな争いも起りません。そもそも、山尾さんは「移住しない」とおっしゃっています。今後も、東京から地域を発信してくださることを期待しています。「ハツモト(倶楽部)」のように、「地域」は東京の暮らしのなかに隠れて存在しています。新年会を地域の特産物が食べられる店で開催したり、アンテナショップで地域ならではの調味料を手に入れたり、隠れている地域を見つけて出す眼力を養えば、地域との心の距離も縮まるはず。距離が縮まったら、生産者にメールするもよし、会いに行きもよし。そうすれば、「地域の役に立っている」という、この人の役に立っている、という、より確かな地域との関わりを実現できるかもしれません。そのとき、関係人口の濃度も変わります。

最後に、もう一つ。2ページ目で10組の関係人口を紹介する際に、「答えは、ページをめくって」と言いましたが、「答え」ではなく「ヒント」でした。10組の関係人口が行っている活動は一つのヒントで、答えは、みなさん自身の関わり方そのものになります。そして、そのすべての答えが正解なのです。

Type 3 2拠点をつなぐことを仕事にする。



信岡良亮さん
 大阪府生まれ、35歳。「アスノト」代表取締役。『道の駅』取締役、2007年に海士町で起業し、14年に東京へ。都会でモデル地域のプロジェクトを協働しながら学ぶ「地域共創カレッジ」を開講。

東京と島根に拠点を置き、都市と地方をつなぎ直す。

島根と東京に拠点を置き、活動する信岡良亮さん。「地方で育った若者が東京へ出て稼ぐ。東京が黒字になるのは当然。ただ、地方の人口減少が進めば東京への若者の供給も減ります。都市と地方の新しい関係づくりが必要だと感じ、東京に出てきました」。海士町を含めた5つの地域をロールモデルに、東京でコミュニティをつくり、東京と地域をつなぎ直すコーディネーターとして活躍中だ。

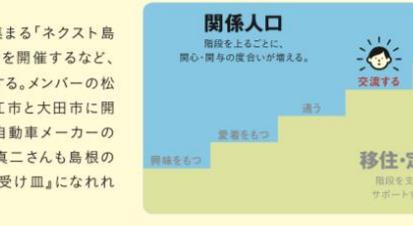
「アスノト」代表・信岡良亮さんの関係人口チャート



ビジネスを通して、ふるさとに貢献したい！

島根県出身の若手経営者が集まる「ネクスト島根」。東京と島根の企業の交流会を開催するなど、ビジネスを通してふるさとに貢献する。メンバーの松井保さんは、念願の事業所を松江市と大田市に開設。8名の正社員を雇用し、海外自動車メーカーのFB制作の仕事に請け負う。松本真二さんも島根の新卒者を東京で雇用。「双方の『受け皿』になれれば」と、さらなる貢献を目指す。

「ネクスト島根」メンバーの関係人口チャート



「ネクスト島根」は、「日本ワイドコミュニケーションズ」代表の松井保さん(中)、「アカンブリッシュ」代表の松本真二さん(右)、「HAPON新宿」を運営する手塚和加子さんから20名のメンバーで運営。

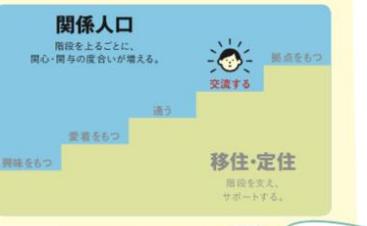


中尾祥子さん
 島根県生まれ、39歳。「極-KIWAMI」食べる通信 from 島根」編集長。「さんべ屋のある暮らし協議会」事務局や「山の駅さんべ」のスタッフを務めるなど、農に関わる仕事に複数従事。「しまとアカデミー」3期生。

都市と地方をつなぐ、「食べる通信」の編集長に。

農林水産省に勤めていた中尾祥子さん。人生の次の展開を考え、島根へUターン。農業への関心を高めていたところ、「極-KIWAMI-食べる通信 from 島根」の編集長として声をかけられ、「この先も島根の農林水産業が続いていく環境づくりをお手伝いできれば」と引き受けた。創刊は2017年12月末。「東京でも『極』のイベントを開き、生産者とながら関係人口を増やしたいです」と話す。

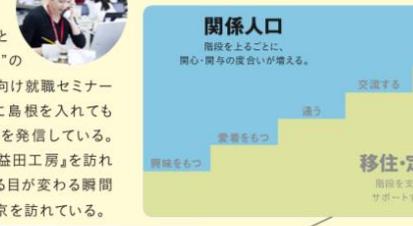
「極 食べる通信 from 島根」編集長・中尾祥子さんの関係人口チャート



学生の島根を見る目が変わる瞬間をつくる！

島根県にUターン後、「ふるさと島根定住財団」で「自分のしごと」の見つけかたという東京での学生向け就職セミナーを担当。学生の就職時の選択肢に島根を入れてもらおうと、島根の魅力や就職情報を発信している。「私が『しまと』のインターンで『益田工房』を訪れたときのように、学生の島根を見る目が変わる瞬間をつくりたいです」と年に数回、東京を訪れている。

「ふるさと島根定住財団」スタッフ・原早紀子さんの関係人口チャート



原早紀子さん
 島根県生まれ、33歳。「ふるさと島根定住財団」ジョブカフェ事業課主任主事。愛媛大学卒業後に上京し、8年間会社員として勤め、2014年Uターン。セミナー「自分のしごと」の見つけかた」を企画・運営。

















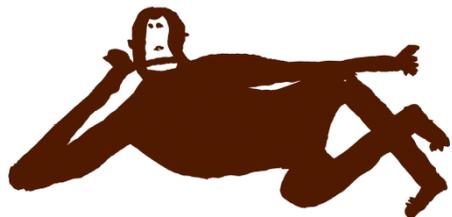


関係人口ど真ん中の人

奈良県・天川村の『スナックミルクィー』



ゴミ、捨てんなよ!











新潟県十日町市の津池という限界集落。ここに住む建築集団が、地域をちょっとおもしろくしている。その名も「パーリー建築」。

立ち上げたのは宮原雅太郎さん。都内の大学を卒業後、2年間専門学校で建築やスペースデザインを勉強し、帰って広島、尾道のゲストハウス「ヤドカリ」のリーダーとして住み込みで関わった。この体験が、彼の人生の転機に。「尾道ではメインスタッフは僕を含め3人だけで、ちょっと建築を学んだだけの僕に自由にやらせてくれたんですよ。他のスタッフは入れ替わり。いろいろな人を巻き込みながら場ができていって、こういう場所のつくり方があるんだ」と、人生観を変えられました。

学校で学んだ建築より本能的だと感じたことも刺激になったという。「自分の手を使って自分の住居を整える行為は、人間以外の生きものが自然にやっていることですね。でも、人間はそれから遠のいてしまっている。セルフビルドこそ建築だと思っただけです」。

2014年秋、尾道から帰京した雅太郎さんは、波谷のある空き家を改装する活動を始め。自ら住み込んで、友達や興味をもってくれた人々を巻き込みながら、自分たちの手で空間づくりを進めていった。

『ギルドハウス十日町』を訪ねてみました。

「パーリー建築」で、毎日がパーティ!

「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」で賑わう新潟県十日町市で、芸術祭とは別の盛り上がりを見せているシェアハウスを発見。その中心に、ある建築集団がいました。

photographs by Hiroshi Takata, text by Yoshino Sakuno

とにかく「パーリー」を続けながら、使われなくなった建物を改装する。そんなユニークなメンバーって?

この3人がパーリー建築

農耕部隊のリーダーです!

この3人がパーリー建築

建築部隊のリーダーです!

この3人がパーリー建築

狩猟採集部隊のリーダーです!

白鳥家シェアハウス「ギルドハウス十日町」と住人のみなさん。「ハウスも僕でも来てほしい」と雅太郎さん。

わたしの居場所
my place to live

愛知県新城市の
新しいカフェ＆ゲストハウス。

『Hooi Hooi』は 奥三河のゲートウェイ

5月にランドオープン予定の『Hooi Hooi』ゲストハウスだけでなく、
カフェや足湯バー、シェアオフィス、移住・起業支援の機能も備えて、
自然豊かな奥三河地域の入り口として、さまざまな使い方を提案します

Photographs by Ayumi Hoshino / text by Kenjiro Hara

オケゲに例じると、もう通じ方が好ま
れたが、今は違う。知る人ぞ知る地
域へ足を踏み入れ、賑やかな光景を写
真に撮り、SNSにアップして友達
に載せるという暮らしを羨ましい人が
増えている。

ここ、愛知県新城市の山間にある
温泉街。湯谷温泉は、とちうるかとい
うと四季の観光客を相手に商売を営
んでいた。そのせいか、最盛期は14
軒あった旅館も9軒に減少。空き家
となった旅館や土産物店が通り沿い



今どきの旅のスタイルに、
フィットした宿泊施設を！

少子高齢化や若者の流出によっ
て、「寂しい感じ」になりつつある地
域が全国に増えている。日本の人口
減少が大きな原因だが、もう一つ、
若い人たちのライフスタイルの変化
も原因であるように感じられる。

例えば、旅のスタイル。以前は
有名な観光地にツアーで訪れ、温泉
旅館で会席料理に舌鼓を打ち、カラ

上の『Hooi Hooi』が完成の出来は、新城市内にある奥三河の山間に建ち、コイノズカ
の橋を渡って、アノ木製の看板の設置が

ゲストハウス・ガイド
Guest House Guide

湯谷温泉
来てねー！

若女将も
帰っています！

スタッフ探してねー！

古い温泉旅館を
リノベーション。
楽しみ方いっぱい
の施設ができた！

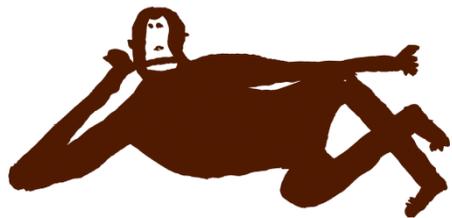
『Hooi Hooi』を
立ち上げた高倉直
洋さん（左ページ
右欄）と、『なごや
観光大学』の人たち。



関係人口を迎え入れる人 福井県大野市の「水をたべるレストラン」



ゴミ、捨てんなよ!















宮城県・唐桑半島が元気です。 社会を動かす ペンターン女子!

あたらしい価値観を持って地方へ移住し、
そこで始まった人生を楽しんでいる女子チームを紹介。
でも、ユニットチームなのではなくて、
まだまだ移住者を募集しているそうですよ!

photographs by Masaya Tanaka text by Yoshino Kokubo



宮城県の最北東端に位置する唐桑半島。リアス式海岸特有の美しい景色をもつ。

陸地からつららのように細く延びた、唐桑半島と呼ばれる宮城県気仙沼市唐桑町。市内で最も太平洋側に突き出ているため、3・11で甚大な被害を受けたところでもある。

しかし、この小さな半島で、あたらしい移住のカタチが始まっている。3・11からの約5年で、唐桑半島へ移住した人は15人ほどになった。なかでも、若者によるまちづくりサークル「からくわ丸」に携わっている移住者が9人。彼らは、半島に移住することを「ペンターン」と命名

した。「ペン」は、半島を意味する「Peninsula」から。9人のうち、5人が女子で「ペンターン女子」と呼ばれるようになった。

そのリーダー、根岸えまさんは、取材にもんべ姿で登場し、「地元のおばあちゃんが作ってくれたんです。一番のお気に入りです」と話し、「このもんべに、ニット帽とデニムシャツ、ムートンブーツを合わせているところがポイントだよ」と、他のメンバーと笑った。とにかく明るく、笑いの絶えない5人だ。

根岸さんが初めて唐桑半島を訪れたのは、2011年10月、大学2年生のときのこと。「唐桑町内のある地区の運動会にお手伝いとして参加するボランティアでした。私は東京生まれ、東京育ちで、これまで地方に行ったことがなかったんです。集まった地元約70〜80人が大家族のようでした。人と人の距離が近いので驚きました」。

その冬、根岸さんに衝撃的な出会いがあった。「地元の漁師さんから、震災の話が直接聞くことができました。津波が来る前に船を沖へ出す「沖出し」をしてその方は助かったのですが、行方不明になってしまった漁師さんもいたことや、荒れ果れた町で人から裏切られるようなことがあり絶望したことを、涙ながらに語ってくださいました。それでもなぜ漁師を続けているのかを聞くと、「ずっと漁師として生きてきたから、自分が漁師として先頭に立ってこの地域をどうにかしたい」と、圧倒的な使命感を持っていたんです。どん底から這い上がる人の強さを感じましたし、命を引き換えに仕事をしている人のすごさに価値観が一気に変わったんです。こういう方をもっと

ペンターンのペンは、ペニンシュラから。
つまり、「半島移住」のことです!

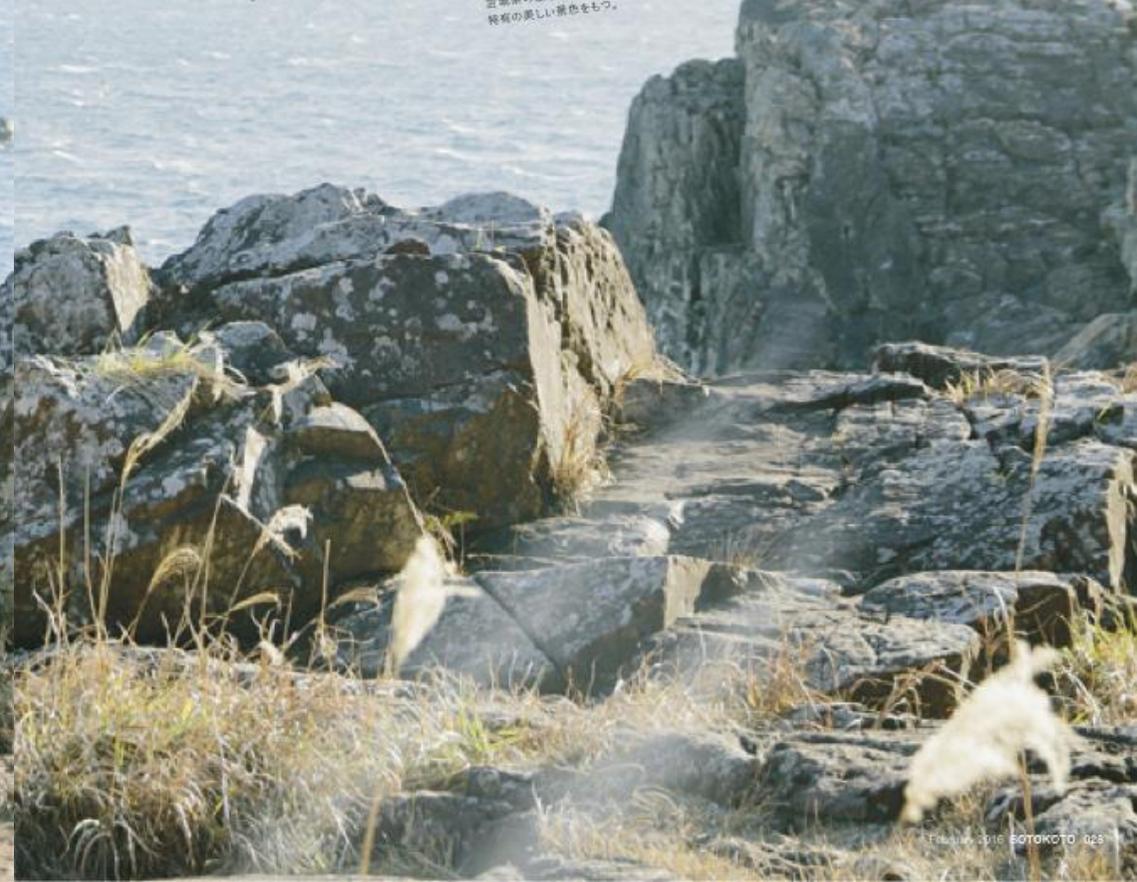
Peninsula

増やしたい、この町のために頑張る人ももっと増えたら」と。根岸さんはこれを機に、2012年に大学を休学し、1年唐桑半島に滞在。「からくわ丸」などの活動に没頭した。その後、復学するときには「東京に戻るのほらかったけれど、もっと勉強したいという気持ちで芽生えていた」という根岸さん。生産者の顔を知ったことで一次産業に興味を持ち、あるNPOでインターンを経験した。その母体企業から就職の誘いも受けたが、唐桑半島へ戻りたい気持ちが強く、2015年3月に大学を卒業し、ついに4月に移住した。

佐々木美穂さんは、いち早く唐桑半島へ入ったメンバー。当時は兵庫に住む大学1年生。ハンセン病に関する海外でのボランティア活動をしていて、唐桑半島に著名なハンセン病の元・患者がいたことでこの町を知っていたため、2011年3月にボランティアとして入った。通ううち、居心地のよさに移住を意識するようになり、2015年3月に大学を卒業し、4月に移住した。「実はマスコミ志望で内定もいただいていたのですが、縁もゆかりもない東京での生活を考えたら、同じ志をもつ仲間



唐桑半島の先端にある岬・蟹崎にて。冬の寒さのなかでも、とっても元気の「ペンターン」女子。





真心込めて
もらってます!

和歌山の温暖な気候によって甘く育ったみかん。温州みかん「田村みかん」は、12月初旬に最盛期を迎える。

特集
関係人口入門

Think Local. Think People
CHAPTER

【関係人口を迎え入れる人】

「みかん愛」と「田村愛」の
強さで関係人口を増やす。

持ち前のノリのよさと、
楽しくなっちゃう巻き込み力!

榎原正都さんは、

1年で延べ100名を超える大学生が足を運ぶ場所となったブランド「田村みかん」の産地、和歌山県・湯浅町田地区。その裏には、みかんの全国消費量減に危機感を覚えた榎原正都さんと仲間のみかん農家の活躍がありました。

Photographs by Hiroshi Takakura text by Hitomi Nakano

世帯の半数がみかん農家。
田村はブランドみかんの里。

「田村はおいしいみかんの生育に絶対のロケーションなんです」と笑顔で畑を指差す榎原正都さん。温暖な気候に強く吹き付ける潮風、ストレスがかかるほど果実は甘くなるそう。思われた土壌で育った「田村みかん」のブランドは、一般流通の5倍近くの価格で取引されることもある。

人口約1000人、250世帯の有田郡湯浅町田地区(以下、「田村」)。約半数の120軒がみかん農家だ。「幸美農園」5代目園主の肩書で母親と共にみかんづく



「幸美農園」の7代目・井上信太郎さん。みかんをつくりながら田村を盛り上げる、榎原さんの心強い味方だ。

「幸美農園」園主・榎原正都さんの
関係人口チャート



くりと携わる榎原さん。おいしいみかんづくりは母親に任せ、今力を入れているのは農業へのハードルを下げ、田村に関わる人を増やすことだ。「田村みかん」のブランドを売るための営業はしていないんです。むしろ生産が追いつかないくらい需要があって。一度、みかんや田村を外から見た僕だからこそ、遊軍となっ

てできることがあると思うんです」

みかんの
トップブランド地、
和歌山県有田郡
湯浅町田地区。

一緒に
おもしろいこと
やりましょう!

そこに
人を出迎える
大きな笑顔が
待っています。



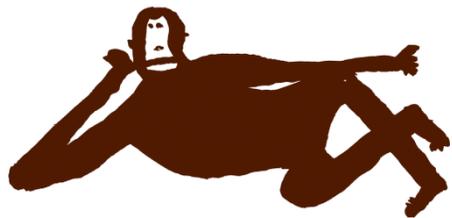
「幸美農園」のみかん畑の前で、広い園内に整えられたみかんの木が並ぶ。母親と共に農作業を行う。

関係案内所

宮崎県・新富町の『こゆ財団』



ゴミ、捨てんなよ!





「こゆ」のスタッフと土産農文和員（前列中央）。「こゆ」は新富町を含む元産地という地域をから取った、農産物の空き店舗をリノベーションしたオフィスの前で。

Social Business #1 **こゆ地域づくり推進機構** <http://koyu.miyazaki.jp>

新富町の旧・観光協会を法人化して設立。持続可能な地域づくりを目指す！

「こゆ地域づくり推進機構」は、新富町の観光協会を解散し、役場が設立した地域会社。「楊貴妃ライチ」など特産品の開発・販売、ふるさと納税返礼品のPRや配送、起業家の育成を行う。元・役場職員で執行理事の岡本啓二さん（組合写真・前列右2人目）は、「ふるさと納税業者や特産品開発で得た利益を



●開放的なオフィス。●元産地の特産品直販サイト「こゆショップ」の専任作業員。●「元産地スタートアップ」の受講生、ケウツリ農家の穂原文一さんと伊藤真由さん。「FAAVU実戦」で資金を募り、新卒起業家で在交種のケウツリを育てたい！。●土産の小年印刷教育さんは、「みんなが楽しめるシカキ製品加工工場をつくりたい！」。●楊貴妃ライチ、大きい！

ついていけないと諦めてしまうケースも少なくないので、もちろん、ビジネスを継続するために頑張って儲けることは大事です。でも、儲けすぎなくてもいいですよ。」

自然体で、自分らしく、バランスを取りながら、持続可能なやり方で実践してこそソーシャルビジネスだと、そんな考えを持って活躍する宮崎のプレイヤーたちを紹介しよう。

自然体で、持続可能。宮崎産ソーシャルビジネス。重さは50グラム以上。左ページ下の写真のように、手のひらに載せるとその大きさも実感できる。皮を剥き、肉厚の果肉を口いっぱい頬張れば、甘い果汁があふれ出てきて、「うまつー」と思わず笑顔になる。「男湯郡新富町のライチですよ」と言うのは、この「楊貴妃ライチ」を

販売する、地域プロデューサーで「こゆ地域づくり推進機構」一助、こゆ財団代表理事の豊田潤一さん。宮崎県を世界にチャレンジしやすいまちにしようと思案する、宮崎ソーシャルビジネス界のキーパーソンだ。「ライチは国内市場の90パーセントが海外産。スーパーのライチも多くが台湾産の冷凍品なんです。新富産の生の楊貴妃ライチを食べたら誰もがそんな笑顔になりますよ。」

世界一チャレンジしやすいまちを目指して。宮崎県は、ソーシャルビジネスの新天地！

ソーシャルビジネスを始めるには、宮崎県が最適な地域かもしれない。その理由は、新しいソーシャルビジネスのビジョンを持ったプロデューサーと、失敗を恐れず、でも自然体で、持続可能なビジネスを志す熱い仲間がいるから！

photographs by Yusuke Abe text by Kentaro Mossi

栽培が盛んな新富町。ライチも栽培されているが、生産量が少なくほとんど流通しないため、「知る人ぞ知る。お宝ライチ」として売っていた。それを食べた豊田さん。「一粒1000円でも売れる！」と確信し、ブランドینگに乗り出した。東京・銀座の「カフェコムサ銀座店」とコラボし、楊貴妃ライチのケーキを商品化。東京のスイーツファンにインパクトを与えた。生産者の森智也さんは、「東京で話題となり、誇りに感じます。ほかの生産者も「こゆ財団」にライチを卸すようになれば理想的です」と、ライチが町の新たな特産品になることに期待する。まさに、ソーシャルビジネス。地域課題をビジネスの手法で解決。ところが、豊田さんは言う。「もう、ソーシャルをつけなくてもいいのでは？」。「何が何でも地域のため」とソーシャルビジネスの概念に



なぜ、この地域がおもしろいの?

なかにとてもオシャレな女性も訪れていますよ。



『オフィスキャンプ東吉野』をハブとして、広がりを見せるクリエイティブ・ライフ。

はターンの兵庫です。新しい生活にドキドキ!

「オフィスキャンプ東吉野」が誕生したきっかけは、10年前。キーマンである坂本大祐さんが奈良県・東吉野村に移住したことに始まる。坂本さんは大阪でフリーランスのクリエイターとして働いていたが、無理がたたって病気を患い、入院。収入も絶たれたため、両親が東吉野村に建てていたアトリエに移住した。

「当時の東吉野は若者が少なく寂しかったです。大阪や名古屋など都市圏で仕事をして、そのまま友達の家泊まったり。東吉野で活動することはほとんどなかったですね」

「県の広報やデザインの仕事を奈良の若者がやってほしいんやけど」と坂本さんにもちかけた。「以来、県の仕事にも携わるようになりまし

都市圏と東吉野を行ったり来たりする生活が続いていた頃、坂本さんはある雑誌の取材を受けた。テーマは移住。取材に同行していたのは、奈良県移住・交流推進室長の福野博昭さんだった。取材後、福野さんは「県の広報やデザインの仕事を奈良の若者がやってほしいんやけど」と坂本さんにもちかけた。「以来、県の仕事にも携わるようになりまし



山や川に囲まれた、豊かな自然のなか、シェアオフィスや coworking スペースとして利用されている。

NEXT! クリエイティブ・ライフを楽しむ人がこんなにも! Creative Life 1

オフィスキャンプ東吉野 URL >>> <http://officecamp.jp>



福野氏の福野です。奥大和でものつくり〜



この古民家を見つけた。東野と長男の間人です!

発案者の坂本です。筑構に立ち寄ってね!

た。そのなかに、クリエイティブ・ヴィレッジ構想があったのです。クリエイティブ・ヴィレッジ構想とは、高齢化によって産業が衰退する奥大和に、若いクリエイターや職人を呼び込むプロジェクトで、坂本さんと福野さんが温泉に浸かりながら話したことから生まれた構想だそう。話し合いを重ねた二人は、東吉野村の水本実村長に直談判に向かった。すでに移住していた、坂本さんの友人でプロダクトデザイナーの菅野大門さんも同行したが、連れていった、まだ赤ちゃんだった長男の間太くんを見た村長が、「こんな赤ちゃんを連れてきた若者が村に移住するのか」と驚き、「それでいこう!」と

新しいクリエイティブ・ライフの地。奈良県・奥大和で始まっていること。

奈良県南部・東部の急峻な山や清流に囲まれたエリア、奥大和。その一つ、東吉野村に「オフィスキャンプ東吉野」が誕生し、ものづくりを愛するクリエイターが集まって、村を元気にしています!

photographs by Hiroshi Takaoka text by Kentaro Matsui

念願の古民家を手に入れることができた。

「それが、『オフィスキャンプ東吉野』です」と坂本さん。イメージパースと平面図を描き、地元の建設業者がリノベーションを依頼した。建設資金は、村が用意した資金を元に、奥大和から補助金を得て助った。

オープンして1年。「オフィスキャンプ東吉野」を人口に、東京、大阪、ニューヨークなどから5組10人の若者が東吉野に移り住んだ。奥大和在任のクリエイターが仕事場として利用したり、ものづくり職人が訪れたり、クリエイティブな場として賑わっている。その奥大和在任のクリエイターや職人を紹介しよう!

旅と時間を、ここ阿久根市から編集する。

『イワシビル』に込めた思い。



鹿児島県阿久根市の水産会社の常務取締役・下園正博さんがつくった、カフェやショップ、工場、ホステルを備える『イワシビル』。販売する自社商品の開発では、社員自らが生産者に取材し、阿久根らしさにこだわった「旅と時間」を届けている。名前も中身もユニークな「イワシビル」を体験しました！

photographs by Hiroshi Takaoka text by Kentaro Matsui

地域で生かす、編集力
skills of local editing

「イワシビル」の最善の阿久根駅、高級列車「ななつ星」で知られる水戸商船治さんのデザイン。

「何かやれ」と、父に託された一棟のビル。

最近、丸干しを食べましたか？
「そう言えば、食べていない」という方は、「イワシビル」で販売している「旅する丸干し」を食べてほしい。洋風に味つけた丸干しの、おいしさと新しさに驚くでしょうから。

鹿児島県阿久根市は、昔から丸干しの原料となるイワシの産地だ。その海沿いの地区で80年ほど前、サバやイワシの加工販売を始めたのが、下園正博さんの祖父・薩男さんだ。水産会社「下園薩男商店」として父親の満さんが受け継ぎ、今は主に量販店に丸干しを卸す商売を営んでいる。下園さんはその3代目。常務取締役を務めているが、ある日、社長の満さんから、「正博、ビルを買おうと思うが」と告げられた。

「どうだ？ 安いらいぞ？」
「ビルなんか、何に使うの？」

下園さんは反対した。「旅する丸干し」という「下園薩男商店」にはない新商品を開発し、それを販売するカフェ&ショップを海が見える丘につくろうと計画していたからだ。「そのための資金に取っておいてほしい」と頼んだが、満さんはビルを購入。「何かやれ」と下園さんに託した。「魚を扱うあの世代の大人は、買いだ」と直感したら迷わず買います。魚の値は取引量に左右され、今日と明日で何倍も変動することがありますから。それでビルも」と苦笑いを浮かべる。

突然手に入った、築約50年の3階建てのビル。市の中心ではあるが、シャッター通りと化した商店街の端っこに位置するこのビルで、どんなビジネスを行えば収益を出せるのか、



鹿児島県阿久根市の中心地にある3階建てのビル。こちらが『イワシビル』です！

「イワシビル」で、阿久根らしさを味わってください！

下園薩男商店
常務取締役の
下園正博さん

「イワシビル」で自社商品を製造し、地域の人や旅行者を迎えるスタッフの皆さん。女子率が高い！



赤い丸屋根が印象的なJR飯田駅。飯田の名産・リンゴがモチーフに、ここまで来れば「裏山しいちゃん」はすぐそこ！

「裏山しいちゃん」に来る、
内発性を持った若者たち。

長野県飯田市のJR飯田駅から歩いて5分ほどの元町交差点の角に、ちよっと変わったスペースがある。2階建ての古い建物をリノベーションし、2017年4月にオープンした「裏山しいちゃん」だ。運営するデザイン会社「週休いつか」の代表取締役社長・新海健太郎さんが「どうぞ」と引き戸を開けて、中へ案内してくれる。「週休いつか」のオフィスも1階に入っているそうだが、まず目に飛び込んできたのは棚に並んだたくさんのお菓子の「くまのこしよでん」という会員制の貸本屋を営んでいます。駄菓子高校生が販売しています」とのこと。2階へ上がると、カラフルに装飾されたスペースが。「ここはレンタルス

ペースで、コワーキングとしても使えます。数人の女性が作業していたので声をかけると、「大丈夫ですよ」と取材に応じてくれた。

水引作家の白子加菜さんは、水引の雑貨やアクセサリーなどをポップな感覚でつくっている。「たまたまカフェで新海さんと出会い、飯田市出身のヘアメイクアップ・アーティストの小椋ケンイチさんと「水引御殿」という飯田の水引を盛り上げるプロジェクトを「裏山しいちゃん」でされていると知り、来るようになりました。水引は飯田の伝統工芸ですが、日常的に水引を楽しんでほしいと思って活動しています」と話す。Webデザイナーの奥山理香さんは、「裏山しいちゃん」をコワーキングスペースとして使っている。「週休いつか」からデザインの仕事を受託しながら、「最近自分でもや

project
108
裏山しいちゃん
長野県



代表の新海健太郎さんに聞きました！
これからプロジェクトを始めよう！
「見切り発車」でいいので始めよう。発車後に発見を積んで、修正を重ねれば、いいプロジェクトになっていきます。

DATA 活動団体名/週休いつか スタート年/2017年 スタッフ数/11名 www.itsuka.co.jp

「週休いつか」の
新海健太郎さんのアプローチ。
『裏山しいちゃん』と、
愉快的なプロジェクトたち。

「裏山しいちゃん」に「山羊印カフェ」、「揮発芸術舎」に「桜咲道」。なんだか変わったネーミングの「場」が次々と広がっている長野県飯田市。愉快的なプロジェクトたちが、「何もない」と揶揄される地域を盛り上げています！
photographs by Hiroshi Takasaka text by Kentaro Matsui

長野県飯田市。
集まった人が次々と輝く、
ローカルプロジェクトの
玉手箱です！

アイソンの見方

アイソンの見方

アイソンの見方

アイソンの見方

アイソンの見方

アイソンの見方

アイソンの見方

「週休いつか」
代表取締役社長の
新海健太郎さん

祝 全国大会出場 今村

裏山しいちゃん

おかし

さあ、
「裏山しいちゃん」の
中へどうぞ！

OPEN

不慣れた
なりの
いす

WiFi
BENZIN
BENZIN
BENZIN

COFFEE
380

滋賀県
長浜市からはじまる、
ソーシャルな
うねり。

「どんどん橋プロジェクト」、スタート!

滋賀県長浜市街地とある路地裏に、コンクリート製の小さな橋が架かっていました。その橋のもとにある長屋2軒分を改装し、農家や建築家がシェアするプロジェクトが始まりました。

Photographs by MOTOKO text by Hisaki Inoue

小さな橋のたもとで町の「ストック」を発見

滋賀県長浜市は、秀吉が初めて築城した長浜城の町下町。賑り返らされた水路や昔ながらの町並みが美しい。琵琶湖北東部に位置することから、この地域は湖北と呼ばれる。北国街道と大手通りが直交する界隈は、町家が軒を連ね、民家や商家として実際に利用されている。町の中心部から徒歩10分ほどの場所に面白い名のコンクリート製の橋がある。かつては木製で歩くとときに弾むような音がしたことから「どんどん橋」と呼ばれている。その橋のたもとにある築80年ほどの長屋をリノベーションし、シェアスペースとして使うプロジェクトが進行している。その名も「どんどん橋プロジェクト」。

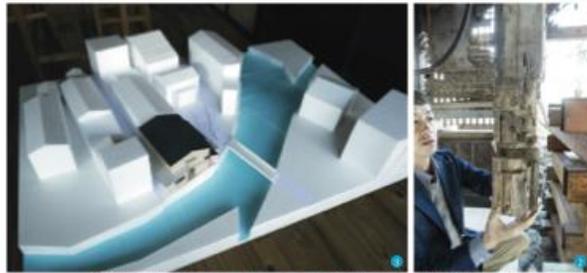
風見プランナーの竹村光雄さんは、町に住む仲間たちと共にこのプロジェクトを進めている。「建築家のオフィス、農家の加工所、野菜を売るスペース、小さな集会所ができる場所をつくりたい」と話す。竹村さんは茨城県日立市出身、都市計画の仕事で長浜に出合った。竹村さんは時間を見つけては周辺を歩き、湖北の文

化や自然に魅了されていく。なかでも、琵琶湖を含む圏域や、そこに組み合う人々の生活が新鮮だった。「僕の育った町には長浜ほどの古い町並みが残っておらず、ここに来て

エキゾチックな気持ちになった」。外からの視点で長浜を見渡すと町や人の「ストック」がたくさんあった。長年人が蓄み、語り継いできたものだ。ただ、その「ストック」も経

済活動の外にある古い家々はないがしるにされてきた。町の中心地であればリノベーションされ息を吹き返す機会を与えられたが、中心地から離れると朽ち果てていく。しかし、

ただいま「シェアスペースどんどん」を建築中。長浜には、こんな動きが次々と生まれつつあります!



● 築80年ほどの長屋、ワークショップをしながら改修を進める予定だ。● 杉村の社が「根柢」された形跡。この時は水害が多く、先人たちは家を直して長年使ってきた。「何故も直しながら使っていたので」と竹村さん。● 川のそばの色が置かれた屋根が物件。川のそばにはイチジクの木も。

高層に建てる家も改修して、人が集う場所ができればまた息を吹き返すのではないだろうか。竹村さんの周りには仕事や遊びでつなぐ農家、建築家、デザイナーなどの仲間たちがいた。「彼らが集える活動拠点をつくりたいだろうか」。

「みたく農園」の立見夫妻は以前から食品加工をする場所があればいいなと考えていた。「一人でつくれば数百万の出費。加工所がほしいけれど、投資に二の足を踏む農家が多い」と立見夫妻は言う。キッチンスペースや必要な機材を置けば、農家を使えるシェアスペースとして使えるし、販売も可能だ。設計士の佐野さんも町中に事務所を構えたいと思っていた。「だったら、共同オフィスとして使ってみたら」と考えた。佐野さんには事務所兼店舗もしてもらえます」と竹村さんは微笑む。

町の上の世代たちからは「ここまで傷んだ建物を改修するのはわかんない」と笑われた。けれど、価値観は違って若者も年配世代も「長浜らしさ」が大切と言う。今まではその言葉の意味に世代間の隔たりがあった。そろそろ同じ湖北像を持つべき時代がきているのかも知れない。



<p>加工所ができるのが楽しみ!</p>  <p>立見 実さん 「みたく農園」の食品を使った料理や加工品、ワークショップなどを企画中。</p>	<p>おいしい米を売りたい。</p>  <p>立見 実さん 「みたく農園」代表。米農家。西日本有数の米産地・長浜の米をここから発信。</p>	<p>年中地元野菜が買える場所に。</p>  <p>七原 徹光さん 「はなの香農園」代表。野菜農家。40歳の経験と知識をもち、新鮮な野菜を安く、おいしい野菜を届ける。</p>	<p>長浜の魅力がウェブで発信。</p>  <p>村上 希一さん 長浜を伝えるWebマガジン「ナガシマ」代表。ウェブを通して活動や情報を発信。</p>	<p>店舗兼建築家です。</p>  <p>建築士「MAPIS_design」代表。完成型「シェアスペースどんどん」を事務所二。</p>	<p>大層生産と消費の次の社会を!</p>  <p>デザイナー、アパレル業界から転身。ショップ立ち上げのノウハウを生かす。</p>	<p>老若男女が集える場所をつくる。</p>  <p>「長浜まちづくり株式会社」代表。外からの視点で長浜を見渡す。この町を元気づけるキーマン。</p>
--	---	--	--	--	--	---



こちらが、どんどん橋!

どんどん橋の上立つ「どんどん橋プロジェクト」のメンバー。さて、これからどんな物語が生まれるか、乞うご期待です。

「どんどん橋プロジェクト」のメンバーがやってくる!

滋賀県長浜市の水辺まちづくり in 東京

美しい水辺のまちづくりが目指される長浜。「どんどん橋プロジェクト」のメンバーとともに、長浜の魅力や、これからのまちづくり、ローカルの可能性を語るイベントを開催します。長浜のおいしい食べ物をご用意して、みなさまのお越しをお待ちしています!

日時 / 2016年3月6日(日) 15:00-17:00
場所 / 東京・有明【OパスカフェARIAKE】
(武蔵野大学キャンパス内)
tel. 03-3549-1011(ネット編集部)

ファシリテーター・指出一一(ネット編集部)



と竹村さんは指摘する。その「長浜らしさ」を表現するのが、人が集い、ナレッジをつくる「どんどん橋プロジェクト」だ。間もなく、橋を渡り、たくさんの方が訪れる。

● 民家の影を流れる米川。大雨などで水量の多い時季にはいまだにあふれることもあるそう。● 東の裏には水路とつながる出入り口がある。かつては米や野菜などを売りに来る商人が舟で訪れたという。





関係人口をつくり、増やす 3つの構成要素

1. 関係人口ど真ん中の人
2. 関係人口を迎え入れる人
3. 関係案内所

ソーシャル&エコ・マガジン ユニークで、楽しくて、価値ある仕事!「あたらしい仕事」の大特集!

ソトコト 10

NO.232
October 2018
823YEN

ソトコト編集部(〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1)発行

行政クリエイティブ
ディレクター

ネオ左官職人
蜂追い

スズメ社鳥

料理開拓人

発酵デザイナー

梅子シエンターティナー

コミュニティビルダー

多様性を生む林業

銭湯活動家

熱燭DJ

グラフィックレコーダー

じよもろソトコト社氏 and more!

New!

Open up a new work
全国の
あたらしい
仕事図鑑

あたらしい仕事図鑑

ご清聴
ありがとうございました。
最新号は好評発売中!
特集「あたらしい仕事図鑑」

